フィールド(現場)からの風 145

宮田守男

旅することで、見えてくるものが ある楽しさを体験してみませんか

7月初旬、地域経済を担う経営者の皆さんと関東方面に旅する。研修内容は、メンバーから選出された研修委員会で企画された。多くの視察先を含む行程は、工場見学・史跡・話題の食事処・異国情緒を楽しむ夕食など、まるで「大人の遠足」だ。

まず、最初に訪れたのが「こんにゃくパーク」。施設見学とこんにゃくバイキングが無料で話題の施設だ。日本の伝統食材である「こんにゃく」を和食文化の1つとして100年後も食べられる日本であるように、こんにゃくのおいしさと文化を伝えたいとのコンセプトの施設だ。全国の生産量の92%を占める群馬県を代表する特産物、「こんにゃくいも」を原材料とした「こんにゃく」。

現在では、こんにゃく王国と呼ばれているが、実は江戸～明治時代までは、茨城県が日本一だった。講談社の「こんにゃくの中の日本史」によれば、コンクリート材料の採石で開墾された広大な山林に、当時高値だった「こんにゃくいも」が積極的に植えられ、平坦地で大規模に作られた歴史や、昭和の後期に価格が安くなり全国の産地が衰退する中で、規模拡大しながら踏みとどまった現状を知る事ができた。

次に訪れたのが、ガトー・フェスタ・ハラダ工場だ。ここも入場無料。館内を見学し、隣のシャトー・デュ・ボヌール直売場でお目当てのラスクを購入する。ラスクは、ビスケットの1種でパンを2度焼きした、消化によって保存性のある焼き菓子の事だ。固くなったパンを食べるために工夫されたもので、わが家では、良くお土産として買い求めている。東京の売店で買い求めるものより、なぜかサクサク感が心地よいと感じさせるのは、工場見学の魅力のひとつなのだろう。

2日目は、雨、今年は、日本列島の南に停滞を続ける梅雨前線が各地で異変をもたらしている、との情報を見聞きしていた。実際「バケツをひっくり返した様な雨が降ったと思ったら、車道のマンホールから水があふれ出す」現場を体験した。行程を変更したが、鶴岡八幡宮には、事前の予約もあり、水浸しの参道を進む。同行したメンバーの同級生が、鶴岡八幡宮の祢宜として神職を務めていて、本殿を案内していただく。宮司1名と祢宜2名の鶴岡八幡宮。別称鎌倉八幡宮とも呼ばれ、武家源氏、鎌倉武士の守護神として、鎌倉初代将軍、源頼朝のゆかりの神社としても知られ、武家の崇拝を集め、応神天皇を祭神とした国幣中社、格式ある神社の祢宜の案内は意義深いものとなった。

雨のため、鎌倉散策や江ノ電乗車の予定を変更して、アジサイで有名な長谷寺へ。この時期は待ち時間の長い季節だが、雨のためか、すぐに境内に。上部にある、アジサイの散策路の入口まで進むと、雨のため、見学できませんとの告知看板。入場口で看板を見落としたかなと思い、帰路の折、確認すると看板は見当たらず。ここでも宗教観を疑ってしまう。たしかに参拝目的の入場料だが、アジサイを堪能できない状況でも、全員が入場したのか疑問に感じたのは私だけだっただろうか。

「しらすや」にて昼食。入口には、20人ほどのお客様が並んで待っている。厳しい目線を感じながら、予約席に。名物の昼いわしやしらす料理でにぎやかな食事会に。スペインの寺院見学で、地元民の並ぶ個人客専用の入口の横を、外国人団体専用の入口から並ばずに入場できた事を懐かしく思い出す。遠方から訪れたお客様に、どの様に訪れる場所を選んでいただくのか、知恵の必要性を改めて感じる。

車中では、お酒の勢いもあり、本音の会話で盛り上がる。災害復旧のこと。プレミアム商品券の事。政府が全国の自治体に本年度中の策定を求めている「地方版総合戦略」のこと。経営者の立場から見る、行政への視線の厳しさを強く感ずる。誰もが地域への想いは熱い。その思いを語れる地域であってほしい。そのことが大事だと理解する事が大切だ。わが故郷こそ、そうであってほしい。人を非難する前に、多くの村民が、前向きに語らえる地域となってほしい。考えさせられた旅でもあった。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

早朝の横浜の街並み、当たり前のゴミの山だが、多くの外国人のお客様の目線に気遣ってほしいと願ってしまう。